梅見乃婦禄

上

へ 13
2901
10

門へ
號 290
巻 10

昭和九年
七月五日
購求

序

蓮池菴の主人近来一象乃
文法を部初て一家言数十百部
物あらはす事日々に遺ふ其中
間々笑話あり善的あり悲的感的

雜的恫的逢的訣的まり家人を
して濃り又濃り撥く手を在て
牧すことを斬ぐ〳〵むその由い何ぞや
實に江湖上の千般美猥のる見
聞する〳〵一猥母すく一ちまびかり此年

濃り這んを雜り這丈主と思ひ
此小官家紙微ひ這大奶こを四字
び這小奶こ紙微ぐ人を美道
鄉遠ものの〳〵醸酒中年入ら
ちもりまく真年一稔の義源出

ものの数の三十日月時肚裏よ愚痴
雲城もいく山寺の寒い宵を焦れ
乗る宿まるまる城何ぞいのやや

幸乗る妹の　鶯春主人

江戸
戸田蓮洲

水面無風
鏡様平
紅楼翠殿
映波明
三又江上
一輪月
影入千
家歌
吹聲

春色梅美婦禰巻之十

江戸　爲永春水著

第十九回

再説峯次郎の母親はお京を嫁とし　お茶を曲ひ女の如きるも種々の乱配あそ縁者の人々を説つけ亦峯次郎の父をも説伏せる極ふ世に無き悪人なれども峯次郎が母を大切ふ孝行を父ゆも尽し家業の事ゆも由緒ゆ無くと思ひ新仕頃ハ老耄家内ふ腰を

落着ば遊びにのミ出しかバお京ハ姑の機嫌をそこなハねて
心配をなせしかバ姑ハこのことを不便に思ひお粂の方へ伴ひ行
改めて姉妹の盃をさせお粂をも折節本家へ呼び寄せて
お京とならべて遊びをさせ何事も勝劣なく寵愛しけれバ両
女の悦びハ一方ならず然るに折々峯次郎ハお粂が
本家に来て居る時ハ家内の用事ありとも何ぞお粂が家に
帰り行時分にハ房吉の方へのミ行様にあらしめお京を母も
お房の方ハ心附ばお粂の方へぞろり峯次郎ハ行遊び居るを

思ひけれバさまたげに女心にてお粂母子を恨みけりさりながら
或時峯次郎の母ハお京を連て柳川亭のお粂が許へ来り
つれしが少し顔色をあしくなして奥へ通り座に在るをお粂
の母ハ挨拶なしながらお京を見まバ泣貌にて居るゆへ様子を
なぜか会釈をし夫より二階に向ひお粂を呼べバあまりを
よびよせて峯次郎の母を峯母へ今日ハお粂に種々とお影も申さん
こともあり亦此儀も此る中から兎角気分がさくざくしく
ぶらぶらと鬱情様子で困りますからチットまで此方へ来て

お倉と二人が和合して此子の病気なれども峯次郎に看病
させ度から連て来ましたのサそして今日ハ峯次郎ハ何所
へか出ましたかへ　くら「イヱ只今化粧をして着物を着かへて
ゑね「アレサお倉の子でハござりませんハ峯次郎ハ何所ぞへ
出ましたかといへバ　くら「ヱ峯次郎さんへ　ゑね「居ますまいかえ
くら「イヱくお宅でハござりませんか此方ハ久しく此方へハお出で
なひからお倉も案じて居りましたけれども私が中々もへ何も
案じることハないハ大略お見世がおいそがしいから夫で此方へお出

なさるお子がないので在所に置て居りましたと　ゑね「ナニ何様
いうして家業のことを手伝ひでもさせる様なれバ中々ハなひ
けれども久しぶりで家へ帰りてあるも子ひの不調法の（これハ峯次郎の父を）
さしおいて弟子を出生して戸　お京を嫁にする様に志たり亦お倉の
ことも余り義理ないけれどと思ふから此所の家をとらして夫と
所がお家方母親の気が固がましく　お聞でなひヨ不残峯次郎の
為にした私の苦労を何とも思ハずに遊んで歩行も宜ひ
けれどせめてのことに昼半日夜ハ二更より三更より時刻を

極て家内へ帰る様ふまれバ名ゆも用のあひ身ぶごろう私も
此娘もこれハうあるひが他へ出ようといろこう五日も七日も家
へ寄つゞ仕方へだろう来て居ちハ内外の者の思くも悪ハ
だろうう私ゞ世間へ出えて海あひ家みの初義半一お京も
可嫌そふで於条女ハよろこふけまども此娘の公を汲うけて義
理ものふとこを思門こう峯次郎ゞ長居をせね様ふお条ゞ七
ほうこもようさそふなものごと私ハ思門て居るけまどもお京ハ変
腹婦腹ニア お京ようお条の方ゞ本家へ入家様ふお思ひどろ

けまども然きると私ゞ病のうの宗初ろ苦労ゞ一番悪人ゞ
同ゞ縁者の様でお条もお京も私の乃ゞ姪のうのごろう両
方ともふ可嫌ゞふ喜ろハあひけまどもお京を様ふこのハ

生重
草久
走廊

菜の御や

田舎の泉上人仕幸てお京を峯次郎に添せ度とりふ親の願ひまこと戦しい如ごとお思ひ知ぐ文は分てく大金を峯次郎の方へ送ぐまる筆理もあり四方八方の雑ぐ事ものこと私が骨を折ぐうて治ちこのごろう峯次郎が私へ對して気の程毎でもおしく思報しふ気を休めさせても雑ぐ事ありませんろトの中ふお茶八化粧をしてもりくまろ伯母へのさろをしてあくまのさろをれば京へ入りのちお京へ別しをさぐしくくこのうさもちろるまもち温顔をつくろふれ新しくまさ[illegible]

それろうふお茶こお京をいぐ[illegible]

やろぐ[illegible]

此時お茶お京の二女ハ下座敷の中のるゆで三味線をやと

扨ぐ茶見勢の方ハ客をもうけまぐ下女ぐ呼ぶ宵の際ま

居るのく両女ハ浄留璃をうろう居る

上無

よりあーびきの山めぐり四季のぐらも面白ク

梅ぐ笑くぐ柳ぐま移く風のまみくさ[illegible]の

[illegible]そよて[illegible]

[illegible]

[illegible]

かきつばたそうこ時鳥あれ文金あれ高ぶ
まぐ風ぐへ一房ぐどけーまぐさへ小花のたくもへ
ひるうやあ返りの紫も初夏の〈ちれ笑うる
うらうらうらび露ゆもぬまてあつぷうこへ伊佐の
庭の菊ぐさねヨイ〳〵〳〵。ヨイヤサ〳〵よのやさ彩
初ぐぐ三松も枝つく老の坂三上りテンく〳〵〳〵
ポッシ 京へ〳〵ひけるひれへもり魚ぐあ
ひ方ふのるヨト戸棚をあける 京へ伊達しもも松も魚ぐ

義太夫ぐぐ出そうらきひるへ〳〵左右でもあ
所ゃあろうとしこと文句のところハお妹のハあやんとしヒトよヒヨト
ひ物うう見物へ客ぐ来りけるバ〳〵イ〳〵乃入まートいくぐう
巣を汲ふ立あ来ハ側ひあるーー田倉源氏の十二編をあけて
見てある此時見世体ぐる
客ハ二三人連ひて伊勢ぐ
峯屋帝の婦女川ふ拝び居る
修を七帰りーーとぞ

再説 ▲峯次郎の母 ▲母 ●お茶の母 ●二階へ酒くみにゆくこどもの女房の
ことを峯次郎の鼻のうへにかぐるしく舍て居ようぐ
しと下へそゝる浮留理を聞ぐら ▲「コヤおーい所で
糸ゞ切きとそゝぐ ●「ハイそまこを見世へまゝ
お客ゞお出の板へでどざゐます ▲「ハア左板ろま
道理で止と思ひまゝ二十度老の板と
ゆふ所で糸ゞ切きてゝる ●「ホンニ左板ゆ ▲「ア おまへ人も
ゝとこゝも初老の板へば一ッ二ッづゝ載て今ふゐて

見ゝとこゝもゆふ両親のことをおりゐ出ー
まゝよ ●「ホンニ左板でどざゐます 俄
茶勝ふ親のことろうみどもの赤板
茶ぐまゝ 何板もこゝもハ赤板ゆ思ひま
せんヨそれぐら親ゝ茶とひろーくぐゝ中まゝ
遠ひゐゐとぐんぐまゝヨ ▲イヤ それ
でもまづア お茶ハ宝ふ 仕合ぐまゝ お房がうでも
お茶でも揚ってそ おとゝーいことを出見何板ーセ

あの娘さん娘みどもハ当時ハ きく ちひョあの三ッ 米屋帝ガ
娘さんハ 何様ーこうんざる ッ ひかるき 見ぢりべ 様人の一人や
二人ハ 遠慮もさるけまど 下の屋る 娘達と入らって出発る
そそとそのの性るでハ 却て おまるひハる ・「ッ本ーー まさ
うふ女のひるまるまと 放蕩も 自さいませんハるへ 全体ひまれ
分ガ おやさーいくら 私どものみどもを ちひそざと思ー
召そ お世話を 成て 行ちらッ ツイみども 知らも 出様ッ
まーーこので 実ハと ヤまれと お房や お家ガ ちひらのひ

ざざるまひハる ・「イ五 左様でハ ざざるませんョ 実ハ 今日
お京を連て 此所へ 参ッこのハ 奥人ひるめ ー 根を言ッ
まこと お家ひも 最理を 知ッ ちひ 仕方ざこのこを 異見と
小言とちひべて 言ふと 思ひて 来こ 訪ガ ・「ッやく こまハ
何様 いハ ッまけでざるまひる ・「サ 私ガ 様量ひハ 峯次
家の 付ッる中 本家へ 帰ッ ちひのハ お家ガ 此家へ ざッり 帰
寄せて 恵のざらふと 思ひて ッ 迎ひる お言ふ ッこそふと
りべひの 娘ハ 姉さんの 家へ 嫌 様ッらーく 思ひまて ハ 涙ちひの

そのうへのと内端なるおとこのうりかうり安で私が出京せ連て
来て峯次郎あるもお案内も思入小言をいうまと思つて居さう
バテア今一ぐと見世人なと客人とちの帰るでハ仕家へも寄つて
自ひめのみの不埒ばそものがいうまものハなる左様して見
るとお来お京やお案がいつぺそふなことあるものぐらふと
宮ゐテア苦労じやアめりませんの分をのふるも両娘さちハ
嫉妬も嫉妬とのつこふ心もせびのことあるまと困るねく分ふ
ちても先刻の情をよく聞れして見ル峯次郎の命を入るる

但し〜まと親なも両娘達も男ハなるひくらるるるぶいよく今
度ハ勘当でもして仕舞ハるひけまび私も因那の娘人狩
にて海なひつとけと言ふと所が左様すると峯次郎取ふ苦労
さまと娘〜ちふ気の毒ありホンニモウく私かどうぶどもでも気を
ゆむ者もあるまのと男ハまたヨト言まそ少〜胸を痛めて
心知く他を男ハ身を男ハりやや峯次郎の心が変う女郎ふ
情人ハ嫉女の為ふ動気を積とト摘のと意気地をとそる
相手の女宮あて男の身を嫌ともこつぐ知とるべ！

左様する時ハ二人の娘もさぞ苦労をせし由淡文のうき
のこゝろぶ実情のお房お条が心の底命も捨る不了覚悟
兼きづき哀の欲りものるぐわいるきんと胸を痛
暫時言葉もうろうしぶ心を揺したものやうろ
根しと所ぶお糸さぐら両娘ちを周らせる根るハ仕
方ひろうるぶくお案じてヨサア手乳時ふしお宝
一ッお呑りる　ハイ手　お糸きんとそ　お乳だらしお宝成
ート　さぐきもめぐらして
うさを急きあるうけう

第二十四

義理の柵き情のぐ楽しき添きろ苦も極意とまれば
面白ハ只一分ろうて九分の苦しき身を亡きふいろうてハ
互の実意も不実とろう他見で苦ぶ根ろハめぶ然
まぶお条房者お京の三女が思ひくの苦労ありて七ちゆ
さるぐの公死止時ゆしさハの人苦労と辛苦をきれのぶ
哀の情ろ意乳地とろ迷ふハ壮年人の名今更のハ恥
ろぶべしさても お京とお条ハ見世条ゆて往来の人の品定め

寄て遊び居る其姿花にもまさる美麗笑顔にあいく
愛敬の自然なる人にして殊にお条は嫺女風にて婀娜
なれども賤しげなくお京は元来位高き格ある生れ並姑の
好みで幼より化粧し乙女風往来の人も立留りて見惚るゝ
二女を愛て行人なく私かしけれバお京は望の方へ
向て狂奇俳諧の摺ものを張ませの横に張るをながめて
居る書画の大人の會日あるいは俳諧の題を書しる
月並の法條その外番附など張てあり 京「ヲヤく何れも奇

麗な画ざますへその中でとまが一番能ねへ 条「何ぞ人 京「どれサお
画が實に以くねへ

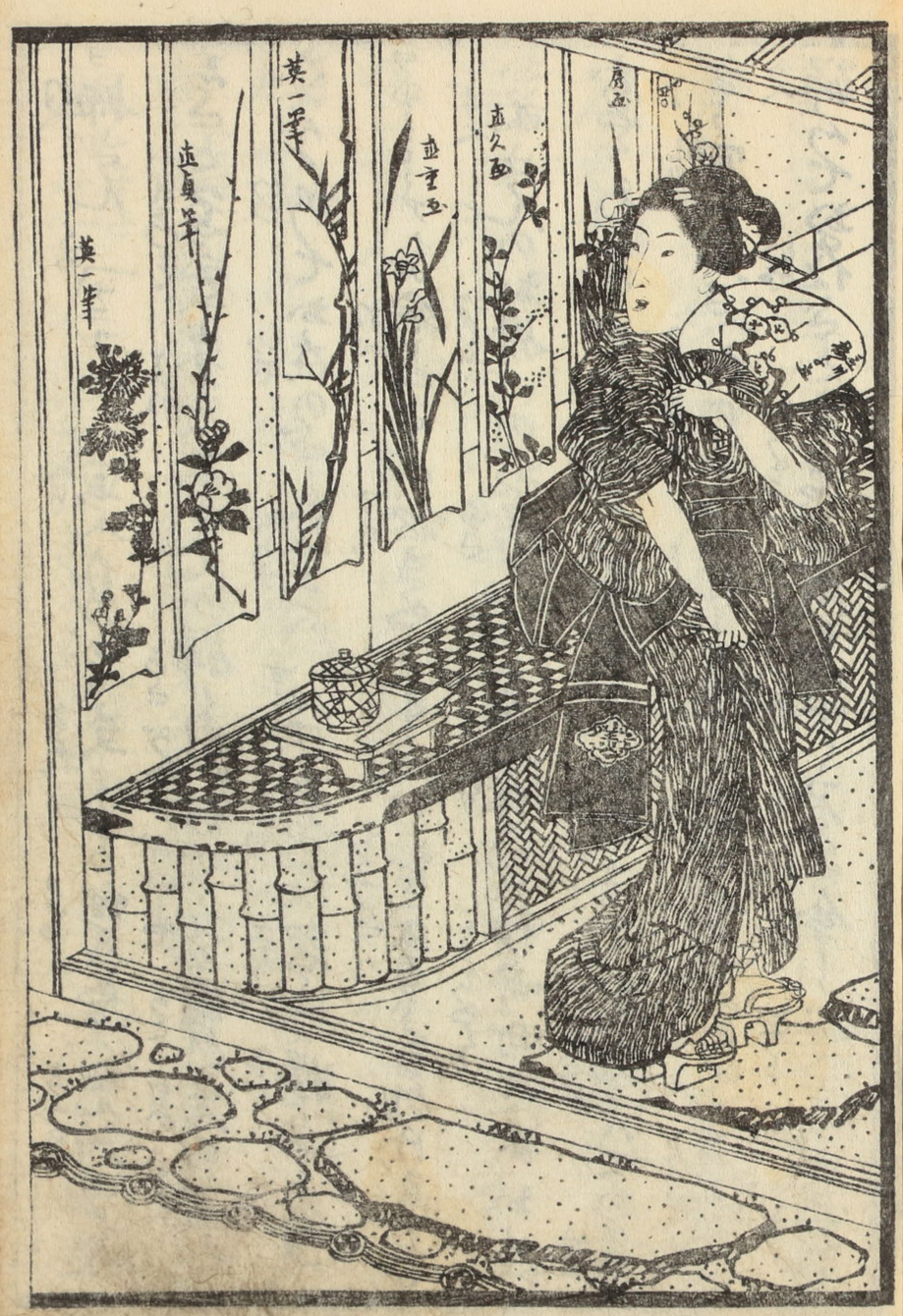
面白き物にうつまこそおもしろゝも
ありとあけくる鶯の聲

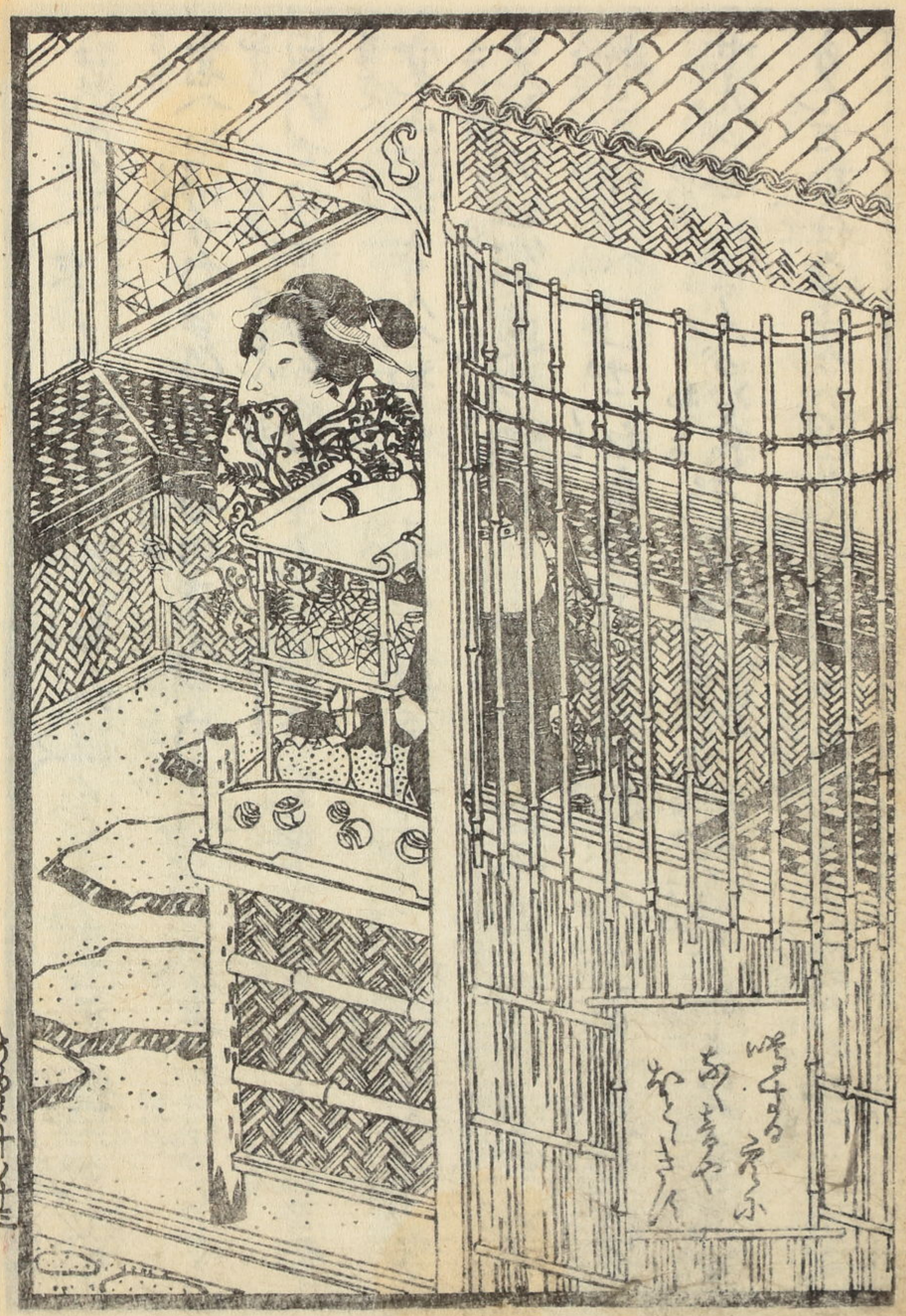
桃江園主人

条「アヽ山しろ河岸の藤さんとかへ貝殺に貰うたのだヨ
毎年奇麗な摺ものをお様ござんす 京「ヲヤ左様かへ峯さんのも
狂奇をお額ざまへ 条「アヽその程らくしへ峯さんのだヨ 京「ヲヤくこれが
久人 条「イヽヱそれハ文亭さんとかいふお方のだヨ其次が峯次郎さん

のごへ　京「ろうそくでもが似て居ると思ひます画ハ描ぐえ「画ハ
英泉の弟子の英一と申ふ人が画さのでもあの家ハ國貞と英
泉と寄合書ごヨ　京「ヲヤ柳亭種彦と申ふ名が書そあるよへ
京「アあまところで宅ハ久しい深草の田舎源氏の作者が旅ど
の世峯次郎さんが覚て居てお出のごヨモウ二十年斗ふるしい
上野山の花の吹雪ハいとハねど
わくうハ笑ひの輪ハ絶ずあり
京「そまとハ絶へが峯次郎さんハ今月でモウ幾月ゆど宅ハお金で

京「ナニ日中ハ折角お帰りぐ下さるとも思ハぬ
宅へお帰りでもあるよう母さんが叶方へでもう来そお在ごらんと
思ひて私を當分姉上さんと同居ハ意とお言のごとう私ハ
宅ハお家さんへ知れの毒でうませんハ　左様久しぶり
先刻のお客様の話ハ何ごるしーが言ひと私も母さんも絶まる
行ごろけよへ　京「ナニ私ハ考アゆーも家さんをとるく思ひ仕合
せんが母さんが父ひさんの業次の考ていハ　兼人浦るひとらってそ気を
うんでお仕ちまるのごとう必ずく私をとるく思ひて暫ひでもうひ


菊一半
菊夏半
菊一半
菊重五
菊久五
房五



ヨ姉さん「十二るく思ふのそよ支ようら私き見ア先刻のそる
きごと京度峯次郎さんが婦人川の喫女ら興ひ者の家へ
だうり初てお在のごと思ふく京「ア京度ぜごョ嬉ふ〜いさへ
ヲホ〜〜〜テノヨ姉ようさん私きやアまごおあ已ふるうるひけまでも
お茶さんのお姉ひのお房さんとるお姉のが和哥町ろふお在
ぎやアあうませんちそお房さんふお茶さんが雅頼んでお客
ふ冥ら今へ私の方へ峯さんがお帰りでるうても什ふを
帰りてお在ごと本家の用も早くるふ今〜毋さんが言ごと

きくるひのふへト言ハきそお茶ハ胸ふギックリ兵他所ごとふ
聞うせど実ハ姉の房言ご外ふハよるや峯次郎の妻を
うるを方ハあらど然とそ今ハ別まて什所と彼所と隔
たまび お房ハ入りて什姉を身体ふうて乳楽るるる
のこうふんと言ひうグ〜両個の母ハその身の母夫ごもあ
知せるこけふハあらびお房の少仮今更ふ母や世るく知ら
る時ハ峯次郎ようお房ようち井一他ふ笑ひ待りハ
身ガ先ふ七遥蕩のよ悪性る姉と肝で一個の男を表

手ひへ仏のごとくなる親婦姑を欲うて死うことと
親類たちの顔ようごーとのひろくて元とうりぬべーと思てもあて
ぬを阪ろ　お京を本妻お房を妾と定めて此頃八尼ともうう
うん然もせざる時八相ろひ一生父やとのうまりと思案を
枯ろそのうちとも知らねば　お京八猫彼見とさも膝すーく
語合て手ひ目八姑とのうともふ柳川彦ようり本家ハ婦ろ思
向ふ峯次郎のうを案じて手形先を同等ひとろふ手所へ
さぶーれんと知を脳ー居ろうける此度お金八貴婦を極

母とお京人逃出をーて父様くも忍びやろふ我家成さーりので
早くも婦ろ就を雇ひつく畜を下ーて他国を跨ぎ尼寺さーて
ろぎけり

果てしなく
物思ふ
長縄の
浮世ぞ
流乃
術路なり

尾州一宮　狂花亭春蝶

頃ハ六月中旬ありけん小雨更てとる町小路涼しくふ出し
人くも所戸ハ入りて門淋しく往来も絶る折ふる十四
五人の若衆が町の表戸際よりて寝あり
やうやうと仕舞ハしやアれ人ぐんくふ形ばかりアり。「ホン」ニ
モウ丑時ごろふナア。ヤレ〳〵談ヤイ地口方燈の樽を反枝樽て
ちやのやナ　〳〵「ヲヲ」伝側ハ接て居まるとア　▲「然ラバ」そもとドウ
大方燈だろうじア　サア〳〵沖のある沖ふ　やうを〳〵ト木
戸の上家ちく組上し大方燈の両側ふ二階の反根の形ちう

軒へ至代のどくとらくるその両面へ仁田四郎が大猪狩
の絵側を画と富士の裾野の巻狩の仮家ふうけ〳〵役者を
さものゝあ〳〵画ちう。「エコウ」今年の画ハ國直と英泉の画
程ありて評判が往ナア　「そもそもハ初まりのヨ画の後形が遠
ハアナ　〳〵ちく〳〵地口方燈の役者の似顔ハ真ち重がうまく
画さじやア　ものゝ国貞よりも往くふるじゃ　▲「然ラバ」ヨウ仕ごろ
ぢやア人情本の画も往出アア　「サアく」形燈の紙を下まで
往ちく〳〵地上ちうハ何もねへか先刻氷ち賣が来ふ

ちやア ぐつこが泥土ふまつちやア ゐつ〳〵大丈夫ぐ
延が 愛てゐらア 乳配ねくうう下しゐ〳〵 ▲そを 清ちゃッ
ーョ。ア引ゐく風ごナア エキコウこの風ぐ 御神輿さゐをうつぐ時
分ふ 吹て 呉ゐ ちつやア 紙のふ ×十二日中八 風ぐ 吹ても暑の
強ひのぐ 臭ふ ゐ〳〵 ゐひのぐ ●ドレく 臭ふ ゐ〳〵 ちつ 分て
仕舞ぐ サアく 衆人ぐ 働ゐ ゐひゐ まり 笠ぐ〳〵ト 大勢ぐ
祇園ふの 方 地の 跡 とうゐ とづけ 居る 西人 髪ふり 乱して
逃きんふ 穴出ー ゐる 一人の 娘 ゐ人 ゐもいふ 歌同 ゐ 同月の

明ふ 臭の ゐ 雲ゆも ゐ ゐうゐ ゐく ゐ ぐ ゐ 素足の 娘ふ 自ゐも
世ゐく 資後の 方を 見ゐアゐ ぐゐ ゐ ぐ ゐ 穴ヘヲヤ 真平ゐ 免 ゐ 成ゐ ゐ ッイ 急ぐ ゐ ゐ ゐトゐ ゐを ゐ
方ふ 居ゐる 若元ぐ 見て 笑ひゐぐゐ ●ナラく ゐやゐ ゐ ゐと
紙やアふ 紙の 移ゐる ゐ 美羅の ふ 実 当ゐ ゐ ゐやア 本 ゐ で
ぐ ゐ人やゐト 戯言ゐ ゐを 聞 ゐ 娘ハ ゐ ゐ ゐる 体ぐゐ アア 傑
舎の 尼寺へ 来ゐ ゐ ゐ ゐ 紙 来ゐ ゐ ゐ 貧ぐ ゐ ゐ ゐ ゐト 平方
ゐ ゐも ゐ ゐ ゐ 音ゐ ゐく 地ひぐ ゐ ゐ ゐ ゐふ 娘の 退

とりとこれをみるに二三人がたやくもそこ行く近付ける
必竟此座の安否は奈何の亦退来りし者どもハ
何者ぞそこ委しきを知らんとなるべし次の巻をよく
たまへかし

町内氏子中

春色梅美婦祢巻之十